



Title	『批判的論叢』24号におけるミルトン批評の言説：文学論争の再考にむけて（3）
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2022, 19, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88383">https://doi.org/10.18910/88383</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『批判的論叢』24号におけるミルトン批評の言説 —文学論争の再考にむけて(3)—

福田 覚

『ドイツ啓蒙主義研究』の前号では、ボードマーがミルトンの『失樂園』を翻訳してから、1740年にミルトン擁護の書を出版するまでの間に焦点を当て、文学論争の前夜という位置付けで、チューリッヒのスイス派とライプツィッヒのゴットシートとの間の取りを改めて跡付けた。今後、ミルトン擁護の書が出されて以降の動きを見直して、文学論争の議論における啓蒙主義詩学史としての本質の部分を再考していくために、今号では、ライプツィヒで発刊されていた『批判的論叢』<sup>1</sup>24号(1740年)の第4の論考<sup>2</sup>を読み直し、その言説のあり方について考察することにしたい。

この論考では、ボードマーのミルトン擁護の書が取り上げられ、批評の対象とされている。その末尾には、次のように書かれている。

「最後に打ち明けるが、もしもスイスの批評家たちが、彼らには我々の礼儀は何の役にも立たないこと、彼らは沈黙して無視されるよりもむしろ鋭く評価され非難されるのを望んでいることを、我々に非常に明確に理解させたりしなければ、この前書きについての我々の考えをこれほど自由に公然と表明することはなかっただろう。それに加えて、彼らはあえて、すべてを自分たちの洞察や考えで評価している。そうであるなら、我々はいつも存命の書き手に対してはより穏やかな原理に従うことに慣れているけれども、我々にも同じことをする自由があるだろう。」<sup>3</sup>

辛辣な調子の文章へと切り替えたことの理由が述べられていて、啓蒙主義時代の詩学史を特徴付けた論争、いわゆる文学論争へと進んでいったことがうかがわれる。

本稿は、この『批判的論叢』24号の論考を主な検討対象とする。後述するように、ボードマーによるミルトン擁護の書のうち、とくにその序文を具体的に批判したもので、ボードマーの序文が11ページなのに対し、それを上回る17ページのテキストである。

## 1. 詩人の序列におけるミルトン

ボードマーは、ミルトンの『失樂園』を訳したときの前書きで、ミルトンの詩の内面的

な本質について別の機会に論じることを約束した。前号で見てきたように、約束したその書の出版をゴットシェートから再三催促された。ようやく 1740 年に、『詩における不思議なものとその真実らしさとの結合についての批判的論考』として考察が世に出された。これが、「ジョン・ミルトンの詩『失楽園』を擁護して」という副題が付されている、ミルトン擁護の書である<sup>4</sup>。

ゴットシェートは、1732 年 10 月 7 日付けのボードマー宛ての書簡で、「ミルトンの想像力がそうであったような、あのような無秩序な想像力 (eine so regellose Einbildungskraft) が許される規則 (Regeln) を知りたいと切望しています」<sup>5</sup>と書いていた。それに対してボードマーは、自身が擁護の書を仕上げるまでの間、偉大な詩人であるミルトンを非難するようなことはしないでほしい、とゴットシェートに頼んでいる<sup>6</sup>。それまでの一時的なものとして、『失楽園』擁護の基盤にしたいと考えている主要な原則を記してクラウダーに送り、クラウダーがそれをゴットシェートに伝えた。クラウダーはボードマーに、「ご送付いただいたミルトンの擁護を、さもなくば喜んでミルトンを批判するさまざまの人たちの前で読んで聞かせました」と報告していた<sup>7</sup>。こうしたことから、ゴットシェートがミルトンに批判的であることは十分にうかがわれるものの、ボードマーのミルトン擁護の書を待つ姿勢も同時に見て取れた。

ゴットシェートであろうと思われる『批判的論叢』24 号の匿名の筆者は、ボードマーの擁護の書に対して、その序文の部分を議論の俎上に上げている。そこでは、ミルトンに対する擁護の仕方に反論することで、ミルトン自身への批判がこれまでよりもいっそう明確になっている。

この筆者が最初に指摘するのは、ミルトンの『失楽園』は長い間埃にまみれていて、アディソンのような人が忘却から引き出しその名声を高めた、という点である。真に価値ある詩人ならそのような事後的な支援は不要だろうという言い方で、ミルトンの詩の価値に疑念を呈している。

「それでも確かなのは、ウェルギリウスは、死の 60 年後に忘却から引き出してくれるであろうまさにアディソンのような人を必要としなかったということである。」<sup>8</sup>

「従って、ミルトンに同胞がいくらか注意を向けるまで、アディソンのような偉大な人がミルトンのために書き疲れ、そればかりかいわば保証をしなければならないということは、ミルトンの詩にとって決して奇妙な徵候ではない。オーピッツは、その時代に、ウェルギリウスと同じように、代弁者を必要としなかった。」<sup>9</sup>

24 号の筆者は、優れた詩人に対しては不要な世間に広める役をドイツの地においてすることになったのが独訳者のボードマーだと見ている。

「しかしドイツでも、このイギリスの詩人に関して、我々を以前の無関心状態に放置しておきたくないという者がいた。スイスに翻訳者が現れ、私たちにこの詩人を、精一杯ドイツ語で届けようとした。・・その翻訳者は、ドイツ中が直ちにアディソンの側に与して、ミルトンの失楽園をホメロスやウェルギリウスの脇に置くだろうという期待をしていた。しかしこの期待は、無駄であった。この新たに訳された英雄詩に関しては、人々はかなり冷淡なままであった。」<sup>10</sup>

そのあとに続く、よい本は自ずと人々に知られるものであるという議論も、やはり間接的にミルトンの価値を低く見積もるものとなっている。

「擁護者〔＝ボードマー〕は、彼の失楽園は知られていないと考えている。しかし、なぜ知られていないのか？よい本は自ずから知られるものである。ある人がそれを他の人にほめる。後者の人が読んでそれを再び他の人に奨める。そのように運んで、至るところで知られるようになる。」<sup>11</sup>

「たとえば、カニッツやギュンターの詩に対しては、それを買って読んで他の人に称賛するのにとても熱心で、瞬く間に沢山の版を刷らなければならなかつたドイツ国民が、ミルトンの失楽園ただ一つに関してのみそれほど無関心になつたのは、どこから来ているのだろうか？」<sup>12</sup>

ボードマーは、ミルトンの『失楽園』はドイツではまだ十分に知られていないということを擁護の書の序文で書いていて、それを受けの論評である。

いま見てきたように、『論叢』の筆者は詩人の序列ということを考えている。古代人の模倣、近代人の模倣というふうに、優れた詩人を見出して模倣するということが詩学的思考の物語としてある場合に、詩人の優劣について正しい序列を考え出すということが重要になる。ここでの書き方は、ミルトンは、ホメロス、ウェルギリウス、オーピッツ、カニッツ、ギュンターといった者たちと同列ではないという見立てを論の最初に明確に示すかたちになっている。文学論争には、純粹に誰を優れた詩人と判断するのかという批評眼の争いという側面がある。

## 2. ドイツの読者層の成熟

『論叢』24号の当該論考の筆者が書いている詩人の序列についての上述の議論は、忘れて埃をかぶってしまうとか、すぐさま評判になって広まるといった事象に関して、基本的に読者層が書物の価値を正しく判断して反応できるという前提に立っていることをう

かがわせる。このことがすでに、ボードマーとは異なる地平に立っていて、枠組みである理解の物語が違うことを示唆している。

ボードマーは、擁護の書の序文で、イギリスとドイツで読者層の傾向性が異なるということを書いていた。イギリス人には崇高さに対する感受性 (Empfindlichkeit) があるというボードマーの見方に対して、24号の論者は、それはイギリス人に自然と備わったものではなく、アディソンに誘導されてそれを感じるよう仕向けられたものだと主張している<sup>13</sup>。ボードマーの次のような書き方も、ミルトンが認められるようになったのはアディソンのお陰だとする点では同じと言える。

「ドイツ人は、ミルトンの作品において、なじみがない未知の、あまりに多くの高貴な種類の美によって、いわば不意を襲われ、混乱させられるのである。まるで長年暗い地獄に閉じ込められていた人が、あるとき快い陽の光が当たる場所に引っ張り出され、直面した美によって照らされるというより目が眩んでしまい、美を一つずつ認識するには時間を要するようなものである。イギリス人に対して有能な芸術批評家がミルトンの詩の美しさを徐々に知覚させ、それを知らしめてきたのだが、そうなる前にイギリス人が長い年月置かれていた状態にドイツ人は今なおいるのである。」<sup>14</sup>

もっとも、24号の論考の筆者は、ギリシアやローマだけに偉大な詩人がいるのか、我々のところにはタッソーはいないのか、イギリスにも偉大な詩人はいる、ミルトンの『失樂園』が我々の英雄詩だ、というふうにアディソンがイギリス国民の名誉心をくすぐっただけのような皮肉な表現をしていた<sup>15</sup>。ボードマーの方は、アディソンのおかげで読者がミルトンの詩の美しさが分かるようになってきたと考えている。ここでは読者層が言語を共有する国民という単位で見られている。そして、アディソンを一例としてここで問題となっているのは、良き趣味の形成に関わる批評家の役割である。無理に誘導しているのか、よい誘導をしているのか、その働きの意味合いが問われている。

読者層の趣味の形成という点については、『詩的な趣味の本性に関する往復書簡』<sup>16</sup>と題された、1736年にボードマーが匿名で出版した往復書簡がある。偽名が使われていて架空の往復書簡ということになっているが、根底にあるのはボードマーとカレーピオの往復書簡である。対話する二人のうちエウリズスというのがボードマーの偽名である。この書の最も重要なテーマは「趣味」で、書の冒頭で、生まれつき備わっている自然な趣味が様々な要因で堕落してしまうというエウリズスの考えが示されている。感覚的な趣味だけでなく、思考のなかにある良いもの、美しいものを認識する趣味も、万人に等しく自然から与えられているが、悟性よりも記憶の方に気を配る不手際な教師のせいで堕落してしまう、という<sup>17</sup>。つまり、趣味の水準は低下するものと考えられている。

1740年のミルトン擁護の書に戻ると、ボードマーの考えによれば、ドイツでミルトンに対する反響が広がらないのは、ミルトンのような優れた詩人を知らないドイツ人が、平凡

な詩人から感じるよくある楽しみをすぐには手放せないためである<sup>18</sup>。つまり、ドイツ人の趣味の水準は低下していて、イギリスのアディソンのような批評家の登場が望まれるということである。

『論叢』24号の筆者は、イギリス人の間で『失樂園』に対する今日の尊敬をもたらしたのは、アディソンの手練などによるもので、ミルトンの『失樂園』の自然な作用ではないのであるから、ミルトンがドイツでも敬意を集めるという幸運は期待できない、と言う。ドイツにはアディソンに当たる人がいないし、ドイツ人にとってミルトンは同国人ではないので身贊頤は期待できない、というわけである。『失樂園』が称賛されない原因を作品ではなく読者層に帰そうとするボードマーの擁護論は、このようなロジックによって、『論叢』では否定される。

ここでのチューリッヒとライプツィヒの対立点は、理論的な枠組みというよりは、どちらかと言えば現状診断にあると言えそうである。ドイツの読者層の現状に問題点があるとするのがボードマーで、それを否定するのがライプツィヒの側である。

### 3. 言語圏に対する貢献、国民性

上述のように、イギリスとドイツでは読者層の成熟の度合いが違うという視点をボードマーが持ち出したことで、国民性ということが文学論争の一つの切り口を形成するようになっている<sup>19</sup>。『論叢』の筆者は、祖国や祖國の詩人を悪く言い、自分が翻訳したからと言って外国の本の称賛を強制しようとする「この独断的な芸術批評家」を退けるべく、ペンを取らざるをえないと述べる。

アディソンがイギリスになしたのと同じ貢献をしたいというなら、ドイツにミルトンを紹介するのではなく、たとえばフォン・ホーベルクの叙事詩『ハプスブルクのオットベルト』であるとか、あるいは、『プロセルピナ』や『ヴィッテキント』であるとか、あるいは古いイスの吟唱詩人の詩であるとかを探し出して、アディソンが『スペクティター』でミルトンに関して行ったように、たとえば『画家談論』で称賛すればよいのであって、それを何故しなかったのか、と非難する<sup>20</sup>。あるいは、それでもまだ不十分だと言うなら、どうして自らミルトンになって、オーストリアのユピテルに対するアルプスの巨人の戦争を英雄詩にして我々に歌わないのであるのか、と問い合わせる<sup>21</sup>。

アルプスの巨人の戦いを歌った英雄詩などと聞くと滑稽に感じられるが、これは『論叢』の評者がミルトンの詩をそのようなものと捉えていることが言い方に反映されていると見ることができる。その批判の軸は、祖国の文学に貢献することにある。ボードマーの立場では、ミルトンの優れた英雄詩を翻訳し、ドイツの読者層が成熟していくことを期待するという考え方で、それも貢献の一つの形のように思われるが、『論叢』の筆者は、アディソンとイギリス人の関係と相似形となるような貢献を求めている。こうした捻れの根底にあ

るのは、やはり、ボードマーはミルトンを評価し、ドイツの詩人や読者を相対的に低く見ているのに対して、その批評者の方はミルトンを評価せず、ドイツの詩人や読者を相対的により高く見ているという批評眼の違いである。

また、ボードマーは、ミルトン擁護の書の序文で、ドイツ人の哲学気質を指摘して、「悟性の楽しみが心の全体を占めてしまい、それが想像力の楽しみを抑え付ける」<sup>22</sup>、と述べていた。これもボードマーが見る、ドイツでミルトン受容が広がらない理由の一つであった。『論叢』の筆者は、それに対して、次のように書いている。

「彼〔ミルトンの擁護者〕は、次のように言う。ドイツ人はあまりにも哲学をやり過ぎた。綿密な学問と抽象的な（普遍的な）真理へと傾倒することで、少し前から、とても理性的で類推的になっているが、同時に、力強さがなく無味乾燥でもある。悟性の楽しみが心の全体を占めて、それが想像力の楽しみを抑え付けた、と。少しもそうは見えないが、もしそうだとしたら、それはきっとドイツ国民には何ら不名誉ではなく、しかしミルトンの詩にはほとんど名誉とならないだろう。ドイツが、この 20 年間、以前よりも哲学を行ってきたのは本当である。理性は、同胞たちの間で、非常に研ぎ澄まされ、野卑な機知は抑制され、奔放な空想は然るべき範囲のなかに限定された。それによって、自由学芸における趣味も今や幾重にも改善され、以前なら天上にまで持ち上げていたものを軽蔑し始めた。ホフマンスヴァルダウやローエンシュタインや他の似たような虚飾的な (schwülstig) 詩人たちが没落したのは、もっぱらこの哲学的な光のおかげである。その光によって、こうしたまやかしの考え方、書き方をしている者たちの取るに足らない輝きを我々は照らし出したのである。」<sup>23</sup>

国民性としてドイツ人が哲学に傾倒したことが、バロックの虚飾の文学がまやかしであるということに気付かせてくれたのであって、それは喜ばしいことだと考えられている。筆者はさらに続ける。

「しかし、想像力の楽しみがそれによってすっかり台無しになってしまったというのは大間違いである。むしろ、健康な火を作品のなかで覗かせるすべての良き詩人がそれによって大いに利益を得たのである。・・・ホメロス、ウェルギリウス、タッソー、フェネロンは、それによって何も失わなかった。しかし、『アルミニウス』や『バニーゼ姫』やこうした碌でなしたちの他の作品は、以前の絶頂からすっかり突き落とされてしまった。ミルトンも同じように口に合わないということになりそうだとしても、哲学的に思索するドイツがそれに何の責任があるだろうか。ドイツは、間違いなく、このイギリス人にも、ローエンシュタインやツィーグラーのような虚飾 (Schwulst)、途方もない想像、大げさな表現、正しくない判断力が支配しているのを見ている。」<sup>24</sup>

ドイツ人が哲学的に思考するようになってバロック文学は克服されてきたのであり、ミルトンもまたそうした哲学的な思考の光によって退けられるべきバロック文学と同列のところに明確に位置づけられている。

チューリッヒとライプツィヒの論争は、文学の現状に対する診断的批評眼の違いに拠るところが大きいように思われるが、こうした文章を読むと、批評眼の違いと思われたものの背後にさらに判断の傾向性というものがあるようにも感じられる。哲学的に考えすぎて悟性の楽しみが心を占めてしまい、ドイツ人は想像力の楽しみが抑え付けられていると書いたボードマーに対して、『論叢』の筆者は、哲学の光は良質の文学のみを残すことに役立っていて、想像力の楽しみを奪うことにはなっていないと見ている。後に文学史記述において文学論争が想像力重視と悟性重視の違いのように総括された要因の一つはこうした箇所にありそうである。しかし、こうした簡潔な二項対立に圧縮される以前の元の記述を読み直していると、ライプツィッヒの側には、バロックの虚飾の克服という物語があり、それがドイツの国民性を擁護するという物語と結び付いているように見える。

後の世の人は、後世の文学史を構想するところから遡って補助線を引いて、進歩史観で考えた時に進歩に寄与する側はどちらかという判断をして、スイス派の想像力という概念に時代の先駆けのようなものがあるというふうに読み込んできたと思われる。あるいは、そこに書き込んできたと言ってもいいのかも知れない。しかし、ここでの『論叢』の記述は、ミルトンの『失楽園』がドイツ的な啓蒙の哲学的な吟味に耐えられない、バロックと同列のものではないかと問うているのであって、それが当時の時代感覚の一つだったとも言えるのではないだろうか。

このあと、『論叢』の筆者は、ボードマーがドイツ人には美しい作品を感受する自由な精神が欠けているとすることに対して、ギリシア人にもローマ人にも、イタリア人、フランス人、イギリス人にもそれがあって、ドイツ人にだけ英雄詩を正しく評価するだけの落ち着いた想像力がないと言うのかと異議を唱えている<sup>25</sup>。

#### 4. 原作と翻訳の言語

ボードマーは、擁護の書の序文で、一般論として、すべての詩的な作品の翻訳は原作に劣るというはある意味で本当で、ミルトンの詩の翻訳に関してもそれが当てはまる可能性がある、ということを書いている。しかしながら、ミルトンの翻訳に関して一層そういう考え方方に傾かせるであろう二つの仮定、英語はドイツ語よりも表現に関しては巧みで柔軟性があるという仮定と、ミルトンの詩の美しさの大部分は詩行の快い響きにその本質があるという仮定については否定的見解もありえて、とりわけ自身は後者の仮定に対して否定的であるという微妙な書き方をしている<sup>26</sup>。

これに対して『論叢』24号の筆者が書いている批判は、様々な点で辛辣である。

「しかし、こうした言い逃れの弱さを翻訳者氏自ら気付き、それ故、『失楽園』は独訳後はミルトンの『[失] 楽園』ではないと認める。古い詩は翻訳によって多くのものを失う、とりわけその言語が表現に対してはるかに柔軟性がある英語の詩はそうである、と。我々がそもそも筆者氏に対してあらゆる翻訳の弱さを認めようとすれば、ダシエ夫人が散文訳ではあるがその翻訳でホメロスをより素晴らしい恩義をどうして我々はダシエ夫人に対して有しているのか、分からなくなるであろう。そのことから推論するに、翻訳者であっても詩をよりよくすることはできるのである。」<sup>27</sup>

「こうした言い逃れ」というのは、その前に言及した、ドイツの読者には自由な精神が欠けているとした点である。ここでは、翻訳はどうしても原作よりは劣るものだという方向の議論そのものが否定されている。『論叢』の筆者は、ドイツ語でも美しさと強さという点で原典に劣らない翻訳はできるという。ただし、そのようなことを一般化して言いながら、スイスに向けた皮肉も書き添えている。

「しかし言語の柔軟性という点に関して言えば、ドイツのいくつかの地方（Provinz）の言語は、外国語の言い回しに適応するにはかなり硬直的で柔軟性がないということは、ひょっとしたらある程度本当かも知れない。」<sup>28</sup>

そのあとさらに、ミルトンの英語の「強み」というのがどういうところにあるのを『論叢』の筆者は見ていくのだが、ボードマーがミルトンの英語表現に認めているであろう柔軟性の美について強く疑問を向ける内容になっている。この筆者は、ミルトンを大いに賛美している学のあるイギリス人がこの冬にライプツィヒに滞在していたので、ミルトンの言葉の強みについて実際に訊いてみたという。そこで聞かれた答えは、「文法に対する誤り、あらゆる通常の語結合の歪曲、そして、千にも上るその他の普通は許されない、他の詩人は犯すことのない間違い」にそれがあるということであった。しかし、ミルトンの場合、その極めて普通ではない内容のために素晴らしいと見做される、という。

「そうしたことがある言語を豊かで柔軟にするのなら、言語を駄目にして、あらゆる規則に逆らって振る舞い、ほとんどすべての言葉で間違いを犯すだろう、と私は思った。」<sup>29</sup>

翻訳が原典の言語の詩的価値を維持できるかという以前に、原典の言語にあるとされる詩的価値に疑惑が向けられている。

さらには返す刀で、『失楽園』の翻訳のドイツ語に関する、不快なものではないかという疑惑を向ける。ドイツの読者は、この不快な響きに関して、本全体を通して自分の耳に

暴力をふるい続けられるのに耐えられるのだろうか、と考え、『論叢』の筆者は自ら実験を行った。ドイツ語に訳されたミルトンの最良と思われる部分を、可能な限り生き生きとした発音で、日頃詩を熱心に読む人たちの前で朗読して聞かせたというのである。そうしたところ、どんな本でも聞いたことがない奇妙で不快なドイツ語の表現や、この詩人のぞつとする荒々しい考えのせいで、たちまち吐き気を催し、もう止めてほしいと言われた、という。こうした批判の言説は、どういうものを詩として評価するかという理論枠組みが異なることに由来するというよりは、どちらかと言えば、これは端的に認められないという烙印を押すような批判の仕方に映る。

1738年の『論叢』の20号には、ボードマーの詩が掲載されている。その掲載前の1738年7月30日のゴットシェート宛ての書簡では、ボードマーが、耳への響きということを考えながらこの詩を手直しした、ということを書いている。さらには、『失楽園』についてもそうしたいと思っていたということを打ち明けている<sup>30</sup>。従って、ボードマーも、詩を聞いたときの耳の心地よさを考えていたことはたしかだが、『論叢』のこの筆者の実験報告は、多少の手直しという水準の話ではなく、規則に反したミルトンの言語表現は翻訳しても不快なものにしかならないという強い非難となっている。

詩を評価する際の「耳に快い響き」という観点は共通して有しているながらも、チューリッヒとライプツィヒの双方では、ミルトンの通常とは異なる、今日の使用基準から逸脱した言語表現への態度は大きく分かれている。

## 5. ミルトン以外の詩人を評価する批評家の眼

ボードマーのミルトン擁護の書は、ドイツの読者だけでなく、ドイツの芸術批評家にもミルトンが理解されない問題の一端があると述べていた。ドイツの芸術批評家は、『失楽園』だけでなく『イリアス』、『オデュッセイア』、『アエネイス』、『解放されたエルサレム』にも敬意を払っていないので、ミルトンに敬意が払われるのは、芸術の側に不足や不十分さがあるのでなく、芸術批評の側の能力不足に帰着するのではないか、とボードマーは見ていた<sup>31</sup>。

それに対して、『論叢』の筆者は、ボードマーがミルトンに対して行ったようにホメロスやウェルギリウスに対して本を書くという芸術批評家はまだいないが、こうした詩人には大げさな称賛は要らないと考えられているのかも知れない、と異論を唱える<sup>32</sup>。先にドイツの読者層に関して、良い詩人は自ずと知られて読まれるものなので取り立てて浸透の手立てを考える必要がない、と述べたのと同型の言説と言える。

このライプツィヒの筆者は、足りないのはこうした詩人たちのよい翻訳かも知れない、と言う。その見方に拠れば、学のある者のなかでもホメロスやウェルギリウスを母語で停滞せずに読める者は少なく、それができたとしても他の仕事や楽しみのせいでそれをして

こなかった。フランス語の翻訳が十分頻繁に読まれてきたのとは対照的である。また、詩人の模倣ということで言っても、ドイツでは、古代の詩人よりもよくないお手本が選び取られている、という。スイスの芸術批評家でさえ、そのようなことを熱心に行って前書きで自慢してしまうようなドイツの詩人を最も褒めそやして、存命中の最大の詩人と宣言してしまう<sup>33</sup>。ここでは、ドイツにおける文芸の現状診断を、学のある芸術批評家という角度から語っているわけだが、その背後には、古代の詩人を上位に置こうとする筆者の文学史観が見え隠れする。

『論叢』の筆者は、こうしてホメロスやウェルギリウスについて言えたことが、タッソーにまで当てはまっていたとは言わない。その認識に拠れば、タッソーの作品は、魔女だの悪魔だのということで、今日のドイツでは、ミルトンと同じぐらい喝采を得ていない。ミルトンの場合は、無秩序、死、罪、地獄、その他の途方もない想像のせいで喝采は得られていないが、タッソーもそれと同じだということである<sup>34</sup>。従って、ドイツの芸術批評家は、ホメロスやウェルギリウスやタッソーも認めることができないでいて、ミルトンを見る目がないのもそれと同じだ、というボードマーの主張に対しては、ホメロスやウェルギリウスについては上述のような事情があると思われるし、タッソーは、ミルトンと同様ということで、そもそも認められる様子ではない、ということが言わされているのである。

タッソーに関しては、ギージーの研究<sup>35</sup>が着目したように、ゴットシェートが下す評価には両価的なところがあるようと思われる。『批判的詩論』では、すでに「1730年」の初版から「詩における真実らしさについて」の章で、他の者より優れてはいても、それに劣らずしばしば真実らしさに対して過ちを犯してきた、と書かれている<sup>36</sup>。その記述は、1751年の第4版まで変わらない。

しかしながら、先に本稿第3節で見たように、ドイツ人の哲学の光によって、ホメロス、ウェルギリウス、タッソー、フェネロンは何も失わなかった、と言われていて、そこではタッソーは哲学的吟味に耐えられる詩人であった<sup>37</sup>。

さらには、これもギージーが指摘しているところだが、1743年の『論叢』30号では、匿名の筆者がタッソーをイタリアで最高の詩人と非常に高く評価している。『解放されたエルサレム』には古代人の規則が根底にあり、ギリシア人やローマ人の最高傑作を模範としている、という。しかし、この筆者は、あらゆる過ちがないという訳ではないとして、ゴットシェートが『批判的詩論』の「詩における真実らしさについて」の章でタッソーについて論じた箇所を参照するように求めている。それでも、ホメロスやウェルギリウスにも過ちはあるもので、タッソーから上述の称賛を取り上げることはできない、と述べている<sup>38</sup>。

この30号の文章は、タッソーの『解放されたエルサレム』の新しい翻訳について紹介するもので、訳者について、文体という点で、タッソー自身と同じぐらいミルトン的な虚飾(Schwulst)から離れている、と評している点が目を引く<sup>39</sup>。

因みに、こうしたゴットシェート側の評価に反応したのがピューラで、1743年に次のように書いている。

「最近、教授殿〔＝ゴットシェート〕がタッソーの翻訳を、ミルトンの虚飾に対する解毒剤として、予告した。両者自身を、あるいはボアローだけを読んだ者は、そのことについて大変不審に思うであろう。というのも、タッソーの場合、我々がローエンシュタインに対して非難する過ちが、すっかり打ち明けると、比較にならないぐらい多い。そればかりか、いつもミルトンの百倍はある。ローエンシュタインの趣味を持ち込もうとするのは誰なのか、ボードマー氏かゴットシェート（Gottschald）氏か。・タッソーの美しさに関して言えば、逆に、この偉大な精神の持ち主が、古代人の高貴な崇高さを模倣しているところでは、ミルトンに非常によく似ていて、ラティーンの双子の息子、ピコとラウレントのようである。」<sup>40</sup>

ゴットシェートは、ボードマーによるミルトンのドイツ語訳を批判して、コップによるタッソーのドイツ語訳を評価しているが、ピューラの眼にはそれは筋の通らないことのように見えている<sup>41</sup>。

実際に 1744 年にヨハン・フリードリッヒ・コップによる『解放されたエルサレム』のドイツ語訳がライプツィヒで出版されると、文学論争の余波のようにして、ゴットシェートはコップの翻訳を肯定的に評価し、逆に、チューリッヒの側では否定的に反応するということになった<sup>42</sup>。

本節ではとりわけタッソーをめぐる評価についていくらか詳しく見たが、ミルトン以外の詩人を見る批評眼がどのように発揮されているかも文学論争の契機であり、ミルトンを見る眼があるかどうかということをめぐっての論争は、そうしたより大きな視野のなかに埋め込まれている。ボードマーは、ミルトンの翻訳が評価されないことの一端として、ドイツの批評家の批評眼を問題にしたが、それにライプツィヒの側は反発していると見ることができる。

## 6. 論争の構図

『論叢』24号の文章は、ボードマーの書の序文だけを取り上げて、紙幅がなくなったということで、本全体については立ち入って論じていない。最後にその書の目次を紹介して終わっている。ただし、本全体の内容について細かく広範に論じれば、大半の部分で異論を伴うことになるだろうとしている<sup>43</sup>。24号の筆者は、「私たちドイツ人のこれまでの趣味をミルトンの『[失] 楽園』に関して弁護して、満足している」<sup>44</sup>と述べているので、「ドイツ人のこれまでの趣味」というのがこの筆者にとって最も重要な論争の賭け金であったと推察できる。

本稿では論点を 5 つの節にまとめてきたわけだが、結局のところ、チューリッヒの側と

ライプツィヒの側では、思考の理論枠組みが異なるのか、理論枠組みは共有しているなかで下す判断が異なるのか、あるいはむしろ、理論的な基礎付けよりも個別的な趣味判断の方が先行しているのか、こうした言説の在り方についてはどのように考えればよいだろうか。本稿は『論叢』24号の1つのテキストを取り上げたに過ぎず、そのテキストも、ボードマーのミルトン擁護の書の序文を取り上げたに過ぎないことを念頭に置いた上で、ここでの論争の構図を分析的に考えてみたい。

これまで見てきたように、根本のところで、ボードマーは、『失楽園』のドイツ語訳が評判にならないのは、ドイツ語圏の読者や批評家に問題があると捉えていて、ゴットシェートと思われる『論叢』24号の筆者は、その点を否定している。この場合、一方の作者や訳者、もう一方の読者や批評家との間で、詩の良し悪しについての認識に落差があるという見立ては共有されていて、どちらの側に難があるかという判断が異なっている、ということのように見える。また、読者や芸術批評家を、場合によっては作者や訳者も、言語を共有する国民単位で考えようとする視角も共有されている。

前号で見たように、ボードマーがミルトンを訳して以降、ゴットシェートとは書簡等を通じてやり取りがあり、そこでの考え方の違いが論争の下地になっている。それが行き着いた先のこうした論争では、詩人の優れた才や受容者の趣味を判定する批評眼が先行しているのか、その批評眼の背後には異なる理論的な枠組みがあつて判断を支えているのか、その比重を見極めるのは難しい。『論叢』24号の議論の仕方は、批評眼が前面に出てきている印象を受けるが、理論的な枠組みとしても、いくつかの点が浮かび上がってくる。

1つは、ドイツ人の哲学気質に対する評価というところから窺える、悟性の楽しみが想像力の楽しみを抑え付けると見るのか、悟性の吟味がむしろ虚飾的な文学を克服させてくれると見るのか、というところでの両者の理論的傾向の違いである。2つめは、通常の言語使用から逸脱したミルトンのような表現手法を、詩的な柔軟性があると捉えるか、不快な響きを生み出すものと捉えるか、詩的言語についての考え方の違いがある。3つめとして、悪魔や地獄といったものにまで想像を広げる詩の創作を、高みの世界の表現の一端と捉えるか、「真実らしさ」に反するものと捉えるかで、見方が分かれる。これらの観点が、ミルトンに対しても、ミルトン以外の古代や近代の詩人に対しても、詩人が模倣するべき対象かどうか、読者の良き趣味の対象となるかどうか、評価を下す視点として関わってきている。こうして見たとき、ライプツィヒ側の言説の視点はどれも、虚飾的で真実らしさに反するバロック文学の表現について、その形式や内容の克服を一貫して追求していると見ることができそうである。

『論叢』24号から11年後になるが、ゴットシェートは、1751年の『批判的詩論』第4版で、「詩における真実らしさ」の章の締め括りとして、次のような文を書き加えた。

「そうなると、まさにミルトン風に、靈界、ケルビムとセラフィム、あらゆる種類の悪魔、あるいは妖精と魔女に関して我々を困らせる者たち、これらすべてのことにお

いて、あらゆる理性を越え、従ってあらゆる真実らしさを越えた宗教の秘密を我々に語る者たちのことは、どう考えて、どう言えばいいだろうか。こうしたことで、彼らは、私たちに対して詩芸術の領域を人間的な考えを越えて広げていき、真理や真実らしさに反する危険に絶えず行き当たる。というのも、啓示宗教を彼らの悪趣味な創作で拡大すること、つまり、真理を嘘で飾り立て、そのようにして真理を、詩人なら誰もが思いのままにひねくり回す異教の神話と同じにしてしまうことが、神を畏れぬものであるのは言うまでもないが、そのような詩人は、その上さらに、熱狂者(Schwärmer)ではなく利口な読者のためにはたらく理性的な詩(Poesie)に対しても過ちを犯しているのである。ヤーコプ・ベーメとポルデッチュ(Pordätsch)なら、彼らの夢や脳の産物を宗教に混ぜるかも知れない。賢明な詩人は真実らしさのもとにとどまる。それはつまり、人間的なもの、その真実らしさを評価することが、私たちの洞察の限界を超えないようなもののもとにとどまるということである。」<sup>45</sup>

ここで念頭にあるのは、ボードマーとブライティンガーの詩に対する考え方であろう。ゴットシェートは、ヤーコプ・ベーメと、ベーメと共に鳴るジョン・ポーディジ(John Pordage)の位置にミルトンを置いている。議論の核となっているのは、この章の「真実らしさ」の概念である。熱狂者と利口な読者を対置したり、ゴットシェートから見て好ましくない詩的な想像について「夢や脳の産物を宗教に混ぜる」という言い方をしているところに、ゴットシェートが到達した考え方が凝縮されているようにも思われる。

『ドイツ啓蒙主義研究』17号では、クロップシュトックの『救世主』についてのチューリッヒとライプツィヒの論戦を取り上げた。ボードマーは、『救世主』にはミルトンの精神が織り込まれているとして、ミルトンの崇高を理解する趣味がドイツ人に備わることに期待を寄せていた。もう一方のゴットシェートやゴットシェート派の側は、健康的な理性を基準として、虚飾や無意味な熱狂というものを批判していた。そこで議論も、今号で見てきたミルトンをめぐる論争の構図の延長上にあると見てよさそうである。

本稿の議論をまとめるとすると、次のようになるだろうか。ゴットシェートの側は、ミルトンのようなバロック文学の虚飾を克服するというかたちで時代を前に進めるという物語を考えている。ボードマーの側は、ミルトンの崇高が理解されるようにドイツの読者や批評家の趣味が向上することで時代が前に進むという物語を考えている。このようなかたちで論争の構図を捉えることが可能であろう。その際、優れた新旧の詩人の模倣という観点で言えば、ゴットシェートにとってはミルトンは模倣すべき対象には含まれず、ボードマーにとってはもちろん含まれるということになるだろう。そこに記録されているのは、古典的な基準に当てはまらないように見えるミルトンのような存在をどのように受け止めればよいのかというこの時代の戸惑いであり、議論の幅である。現代の文学史記述は、たとえばゲーテなどの古典主義を頂点とするかたちで進歩史観を構想したり、後の時代につながるものを見たのは文学論争のどちらの側なのかという視点で時代推移の物語を考え

たりしてきたように思われる。しかし、それは後の時代があとから上書きするかたちで啓蒙主義に与えた物語であって、当時の両陣営の当事者にはそれぞれが抱く時代推移の物語があったということを本稿では確認しておきたい。

---

- <sup>1</sup> 1732年から1744年まで刊行された『ドイツの言語、詩作、雄弁の批判的叙述のための論叢（Die Beyträge zur critischen Historie der deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit）』（以下、『批判的論叢』、Beyträgeと略記）
- <sup>2</sup> Beyträge. Bd.6 (Vier und zwanzigstes Stück). 1740, S.652-668
- <sup>3</sup> ibid, S.668
- <sup>4</sup> Johann Jacob Bodmer: Critische Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie und dessen Verbindung mit dem Wahrscheinlichen. In einer Vertheidigung des Gedichtes Joh. Miltons "Von dem verlohrnen Paradiese"; Der beygefügter ist Joseph Addisons Abhandlung von den Schönheiten in demselben Gedichte. 1740
- <sup>5</sup> Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.2: 1731-1733, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2008, S.309
- <sup>6</sup> Gottsched: Briefwechsel, Bd.2. S.361
- <sup>7</sup> Johannes Crüger: Joh. Christoph Gottsched und die Schweizer J.J.Bodmer und J.J.Breitinger. 1882, S.57f.
- <sup>8</sup> Beyträge. Bd.6, S.653
- <sup>9</sup> ibid.
- <sup>10</sup> ibid. S.653f.
- <sup>11</sup> ibid. S.655
- <sup>12</sup> ibid. S.656
- <sup>13</sup> ibid. S.656f.
- <sup>14</sup> a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- <sup>15</sup> a.a.O. S.657
- <sup>16</sup> [Johann Jacob Bodmer:] Brief-Wechsel Von der Natur Des Poetischen Geschmackes. Dazu kommt eine Untersuchung Wie ferne das Erhabene im Trauerspiele Statt und Platz haben könne; Wie auch von der Poetischen Gerechtigkeit. 1736
- <sup>17</sup> ibid. S.2f.
- <sup>18</sup> a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- <sup>19</sup> 便宜的に「国民性」という言い方をしておくが、ドイツやドイツ人という場合、現代の感覚とは違つて、ドイツ語圏、ドイツ語圏の者という意味合いで捉えてもらいたい。「祖国」と言う場合も、所属する当該言語圏というニュアンスで理解されたい。
- <sup>20</sup> a.a.O. S.659f.
- <sup>21</sup> ibid. S.660
- <sup>22</sup> a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- <sup>23</sup> a.a.O. S.660f.
- <sup>24</sup> ibid. S.661f.
- <sup>25</sup> ibid. S.662
- <sup>26</sup> a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- <sup>27</sup> a.a.O. S.662f.
- <sup>28</sup> ibid. Vgl. Detlef Döring: Der Literaturstreit zwischen Leipzig und Zürich in der Mitte des 18. Jahrhunderts. In: Anett Lütteken und Barbara Mahlmann-Bauer(Hg.): Bodmer und Breitinger im Netzwerk der europäischen Aufklärung. 2009, S.76
- <sup>29</sup> ibid. S.663f.
- <sup>30</sup> Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.5: 1738-1739, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2011, S.199
- <sup>31</sup> a.a.O. (Vorrede des Verfassers an die deutsche Welt) unpag.
- <sup>32</sup> a.a.O. S.665
- <sup>33</sup> ibid. S.665f.
- <sup>34</sup> ibid. S.666
- <sup>35</sup> Vgl. Lucas Marco Gisi: »Ein gerautes Siegel? Die Bedeutung von Bodmers und Breitingers Rezeption italienischer Poetiken und Poesie für den Literaturstreit mit den ›Gottschedianern‹. In: Anett Lütteken und Barbara Mahlmann-Bauer(Hg.): Bodmer und Breitinger im Netzwerk der europäischen Aufklärung. 2009, S.105-126

- 
- <sup>36</sup> Johann Christoph Gottsched: Versuch einer Critischen Dichtkunst vor die Deutschen. 1730, S.172
- <sup>37</sup> Sieh. Anm.24
- <sup>38</sup> Beyträge. Bd.8 (Dreyßigstes Stück). 1743, S.345f.
- <sup>39</sup> ibid. S.347
- <sup>40</sup> [Immanuel Jacob Pyra:] Erweiß, daß die G\*ttsch\*dianische Sekte den Geschmack verderbe. 1743, S.68;Vgl. Gisi: »Ein gerautes Siegel«?, S.118
- <sup>41</sup> これ以前に、ゴットシェートがピューラの『アエネーイス』の翻訳を評価せず、シュヴァルツの翻訳を評価した経緯については、拙稿を参照のこと。福田覚「ピューラの『アエネーイス』訳の掲載をめぐって——ゴットシェートとの関係を語る一つの挿話」、『希土』41号、29-57頁。ボードマーとブライティンガーがピューラの側に立ち、ゴットシェート派シュヴァルツを支援したので、この対立を文学論争の前哨戦を見る向きもある。Vgl. Johann Christoph Gottsched: Briefwechsel unter Einschluß des Briefwechsels von Luise Adelgunde Victorie Gottsched, Bd.7: August 1740-Oktober 1741, hrsg. von Detlef Döring u.a. 2013, S.XXXIII
- <sup>42</sup> Vgl. Gisi: »Ein gerautes Siegel«?, S.116f. ギージーは、ドイツにおける文学論争を、イタリアとフランスの間の詩学的な論争を反映したものであると見ていた。Vgl. ibid. S.124f.
- <sup>43</sup> a.a.O. S.667f.
- <sup>44</sup> a.a.O. S.667
- <sup>45</sup> Johann Christoph Gottsched: Verusch einer Critischen Dichtkunst. In: Ausgewählte Werke, Bd.VI/3 (Variantenverzeichnis), S.47f. この箇所は文学論争に対する直接的な反応と読める、とシュリーパーも述べている。Vgl. Hendrik Schlieper: „Ich gedenke dieses trefflichen Buches mit Fleiß allhier“. Cervantes' *Don Quijote*, der Roman und das Wunderbare in Gottscheds *Critischer Dichtkunst*. In: Leonie Süwoloto u. Hendrik Schlieper(Hg.): Johann Christoph Gottscheds *Versuch einer Critischen Dichtkunst* im europäischen Kontext, S.78

本論文は、2021年度－25年度日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究(C)「ドイツ啓蒙主義詩学史の再記述－模倣・想像・情念の複合性をめぐる概念史として」(課題番号 21K00435)による研究成果の一部である。